

6 癌患者の DIC に伴う脳梗塞

五十嵐夏恵・高橋 英明・吉田 誠一

県立がんセンター新潟病院脳神経外科

癌患者に発症した脳梗塞は Trousseau 症候群として知られているが、今回我々は、特徴的な MRI 所見を呈した凝固異常に伴う担癌患者の脳梗塞の 5 例を経験したので報告する。

対象は肺癌 3 例、乳癌 1 例、胆嚢癌 1 例の 5 例で、年齢は 58 ～ 80 歳、男性 2 例、女性 3 例であった。

臨床症状は 3 例が軽度の不全麻痺、2 例では同時に左右の頭頂葉症候群を呈した。血液検査上は、発症初期から DIC の診断基準を満たすものではなく、血小板の減少に先立って D-Ddimer の異常値を呈し、経過とともに DIC へ進行する傾向がみられた。DIC が改善しなかった 3 例は 4 週間以内に死亡している。MRI では拡散強調像で多発点存在する高信号域が全例で認められ、特徴的な所見と考えられた。

担癌患者で DIC 傾向を来す凝固異常を呈し、脳梗塞を発症した症例の症状は軽度かつ多彩であった。拡散強調像における多発点存在性の高信号域に特徴づけられる画像所見は、DIC の進行とともに認められる多発性の血栓の存在を示すものと思われた。

7 当科で取り扱った原発性腔癌 32 例の臨床的検討

笹川 基・小島 由美・本間 滋

児玉 省二

県立がんセンター新潟病院婦人科

【緒言】原発性腔癌は婦人科悪性腫瘍の中で稀な疾患である。扁平上皮癌が多いが、腺癌や非上皮性悪性腫瘍発生の報告もみられる。

【対象と方法】1988 年からの 20 年間に当科で取り扱った原発性腔癌 32 症例を対象とし、診療録をもとに臨床的検討を行った。

【成績】

1. 患者年齢は 30 歳から 84 歳、平均 61 歳であった。

2. 臨床進行期分類 (FIGO 分類, 1974 年) 別にみると、0 期 1 例、I 期 12 例、II 期 15 例、III 期 0 例、IV 期 4 例であった。

3. 組織型は、扁平上皮癌 22 例、腺癌 4 例、腺扁平上皮癌 1 例、平滑筋肉腫、平滑筋肉腫 (低悪性度)、悪性リンパ腫、悪性黒色腫、spindle cell carcinoma が各々 1 例であった。

4. 治療内容を検討すると、手術単独施行例と手術と放射線療法を併用した症例が多かった。

【考察】腔癌症例では、発生部位と組織型を考慮し、症例ごとに適切な治療法を選択することが重要と考えられた。

8 局所進行子宮頸癌に対する同時化学放射線療法 (CCRT) の治療成績

加嶋 克則・上村り子・西野 幸治

関根 正幸・藤田 和之・八幡 哲郎

田中 憲一

新潟大学医歯学総合病院産婦人科

【目的】局所進行子宮頸部扁平上皮癌に対し同時化学放射線療法 (CCRT) が、有効な治療法として推奨されている。当科においても 2002 年より施行しているため、現在までの治療成績を報告する。

【方法】子宮頸部扁平上皮癌 21 症例 (I ～ II 期: 15 症例・III ～ IV 期: 6 症例) を対象とし、放射線療法は全骨盤外照射・腔内照射を、化学療法は CDDP あるいは CBDCA を毎週投与した。

【成績】Grade 3 以上の白血球減少は 10 症例 (47.6%)、血小板減少は 2 症例 (9.5%) に認められた。CR は 10 症例 (47.6%)、PR は 9 症例 (42.9%) であり、観察期間 4 ～ 70 ヶ月で、8 症例に再発を認めた。再発症例では、有意に治療前の SCC 高値・傍大動脈リンパ節腫大を認めた。

【結論】CCRT は大きな有害事象を認めず、有効な治療法であると考えられる。今後も症例を蓄積し、長期予後・晩期障害等について検討していく予定である。